

【夏の地貌季語の解説】

東日本「青味返り」（あおみがえり）

木々に青味返りを滴らす

野木 徑草

茶摘みは八十八夜頃から三週間くらいが最盛期。陰暦では五月二、三日ごろからというので茶摘み、製茶は春の季語。新茶は夏の季語。新茶の出回る初夏から梅雨時にかけて、去年の古茶が色と香りを取り戻すというのである。この時期一年経った古茶のこくのある味わいは新茶にない渋い味わいがあるといわれる「青味返り」。

掲句は新緑に雨がそぼ降る一日、古茶をしぼりながら、静かに味わっている風韻の作。

西日本「夏ぐれ」（なつぐれ）

夏ぐれや水平線のほどけ出す

山田 晶子

沖縄の真夏を襲う驟雨。日に何回も見舞うことがある。「ぐり」ともいう。立ち雲（入道雲）が一瞬かき曇り、わっと大粒の雨粒を落とす。日に晒してある穀物や洗濯物などを急いでとりいれ、たいへんな騒ぎになるが、雨はたちまち上がり真夏の太陽がカツと照りつける。一段と暑く、限りなく眩い。

掲句は風がひたと止まり、暑さが淀んだ水平線が折からの驟雨でけむり出す。大景がみえるようだ。

出典：『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂静生

『ゆたかなる季語 こまやかな日本』宮坂静生